

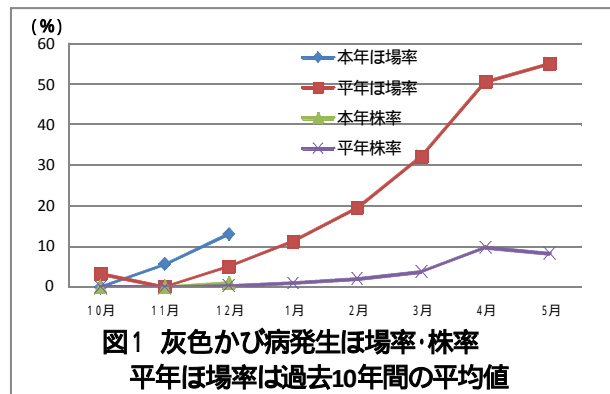
## トマト灰色かび病の発生が多くなっています！

12月上中旬の巡回調査の結果、発生ほ場率は13.0%（平年5.0%）、発病株率は0.9%（平年0.2%）で、過去10年間で発生ほ場率は2番目、発病株率は最も高い値です。ここ数年は、年内から灰色かび病が多発し、その後の発生が止まらない傾向にあります。

気象予報によると、向こう1ヶ月は平年に比べ、降水量が平年並～多く、日照時間が少ない～平年並の見込みで、今後の発生増加が予想されます。

表1 越冬・冬春トマトにおける灰色かび病の発生状況

調査時期	発生ほ場率(%)		発生株率(%)	
	本年	平年	本年	平年
10月	0.0	3.3	0.0	0.1
11月	5.6	0.0	0.0	0.0
12月	13.0	5.0	0.9	0.2
1月		11.3		0.9
2月		19.4		2.1
3月		32.2		3.8
4月		50.5		9.7
5月		55.1		8.2



### 1 防除対策

- (1) 灰色かび病の発生しやすい条件は15～23℃と比較的低温で、多湿条件であるため、ハウス内の温度及び湿度管理に注意する。特に曇雨天日が続く場合は、循環扇、暖房機を稼働し、ハウス内の湿度を下げ、植物体表面の結露を除去する。
- (2) 灰色かび病は腐生性が強いいため、発病果実・葉、枯死葉、花卉等は、すみやかに除去し、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- (3) ボトキラー水和剤を使用する場合は、低温条件下では効果が現れにくいので、10℃以上の温度を確保するよう努める。また、本剤は予防剤であるため、発病後は化学農薬中心の防除に切り替える。
- (4) 曇雨天時は液剤の使用を控え、くん煙剤等を使用すると過湿防止に有効である。
- (5) 同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。

表2 トマト灰色かび病に登録のある農薬例（平成23年12月12日現在の登録状況）

系統名	薬剤名	希釈倍率等	使用時期 / 使用回数
ベンゾイミダゾール系	ゲッター水和剤	1,000倍～1,500倍	収穫前日まで / 5回以内
アザリルリミジン系	フルピカフロアブル	2,000倍～3,000倍	収穫前日まで / 4回以内
抗生物質	ホリオキシAL水溶剤	2,500倍～5,000倍	収穫前日まで / 3回以内
ジカホキシミド系	ロブラールくん煙剤	1	収穫前日まで / 3回以内
その他	カンタストライフロアブル	1,000倍～1,500倍	収穫前日まで / 3回以内
	セバアフロアブル20	1,000倍～1,500倍	収穫前日まで / 3回以内
	ベルコートフロアブル	2,000倍	収穫前日まで / 3回以内

1 くん煙室容積300～400m<sup>3</sup>（高さ2m、床面積150～200m<sup>2</sup>）当たり100g（50g×2個）  
トマト灰色かび病の薬剤感受性検定結果については、当センターHPを参照下さい。

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。  
当センター携帯サイト (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>) もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012